記憶のリサイクル

かちこ

夕方五時。
食堂の窓に色がつき始める頃になると、決まって騒ぎが始まる。
「帰る！」
椅子を引く音が響いた。
私は思わずため息をもらす。
山中ハル　八十六歳。
認知症の利用者さんだ。
普段は穏やかなのに、夕方になると豹変する。
「離して！」
職員の腕を叩きながら叫ぶ。
「お母さんが探してるんだから！」
また始まった。
私がイライラして立ち上がりかけたその時、中村さんが肩を叩いた。
「優しくね。」
私は苦笑する。
中村さんは介護士歴が長いベテランだ。
「有名な聖書にだって『白髪の前では立ち上がりなさい』って言葉があるのよ」
「えぇ？」
「年長者には、その人が生きてきた年月の分だけ敬意を払いなさい、ってこと」

私は書類をまとめながら言った。
「でも私たちが立ち上がる前に、ハルさんのほうが先に立ち上がっちゃうんですから」
私が茶化したその時だった。
「帰る！！」
食堂からさらに大きな声が響く。
「あ、ほら。言ったそばからです。」
私は駆け出した。
「ハルさん！　危ないから座っててください！」

認知症の帰宅願望は珍しくない。
家へ帰りたい。
家族に会いたい。
そういう訴えは何度も見てきた。
けれどハルさんは少し違った。
家に帰りたいとは言わない。
夫の名前も忘れている。
娘の顔も分からない。
それなのに、
お母さんが探してる。

その言葉だけを繰り返す。

少子高齢化によって、この国は大きく変わった。
介護、医療、物流、農業。
社会を維持するため、人材は不可欠な職種へ再配置された。
作家や脚本家、音楽家といった娯楽産業は大幅に縮小されている。
人々は生きるために働く。
でも、文化が乏しくなった。
そこで生まれたのが記憶のリサイクル、失われる記憶を文化にしよう。と言うのだ。
人材不足を補うために技術や知識は教育資源として再利用される。
恋愛や家族との思い出など、個人的な記憶は娯楽として図書館へ送られる。
人々はそれを読む。
誰かの人生を。
物語の代わりに。

「気持ち悪いと思いません？」
休憩室で私は言った。
「何が？」
「記憶本ですよ。他人の人生を娯楽にするなんて」

「そお？見ず知らずの人のなら別になんとも思わないけど」
「でも知ってる人のだって読めるじゃないですか」
中村さんは少し考えて言った。
「読めて嬉しいと思う人もいるんじゃない？」
私は首を振った。
納得できなかった。
他の人の人生を覗き見するなんて。
中村さんは笑った。
「一回読んでみたら？」
「興味ありません」
「ハルさんのでもいいから」

休日。
私は結局、図書館へ来ていた。
本当は、ちょっと興味があった。
ただ認めたくなかっただけだ。

記憶閲覧ブースは静かだった。
検索端末に名前を入力する。

山中ハル。

二百八十二冊。

思わず息を呑んだ。
認知症によって失われた記憶の数だ。

一冊を手に取る。
『二十七歳・夏』
本を開く。

海だった。
若い女性が笑っている。
ハルさんだった。
意外にもミニスカート。
隣には若い男性。
二人で石など拾い微笑んでいる。

施設で見るハルさんとはまるで違った。

私は次々に本を読んだ。
結婚。
出産。
娘の入学式。
家族旅行。
何気ない日常。

読めば読むほど不思議だった。
毎日顔を合わせている。
なのに何も知らなかった。

そして気づく。

幼少期の本がない。
一冊も。

検索条件を変えても同じだった。
五歳以前の記憶だけが存在しない。

違和感を抱えながら読み進めるうち、一冊の本にたどり着いた。

『六十八歳・冬』

病室だった。
年老いた女性がベッドに横たわっている。
ハルさんがその手を握っていた。

「ごめんね」

女性が言った。

「本当は私、お母さんじゃないの」

私は息をのんだ。

戦後の混乱期。
女性は娘を失った。

そして迷子になっていた幼いハルを見つけた。
最初は保護するつもりだった。
だが手放せなくなった。
そのまま娘として育てた。

女性は涙を流しながら言う。

「あなたのお母さんはね」

震える声。

「ずっと探してた」

その瞬間。
幼い少女の記憶が蘇る。
温かい手。
日焼けした横顔。
明るい声。

けれど顔はぼやけている。
名前も思い出せない。

本を閉じた時、私はしばらく動けなかった。

さらに読み進める。
ハルさんは本当の母親を探そうとした。
事情を知っていそうな人に聞いてまわった。
古い新聞を探した。
役所を訪ね歩いた。

でも見つからなかった。

そして認知症になった。

私は司書に尋ねた。
「記憶はどういう基準で本になるんですか」
司書は当然のように答えた。

「忘れられた記憶だけです」

私は黙った。

「忘れていない記憶は回収できません」

その瞬間、つながった。

夫との思い出。
娘との思い出。
孫との思い出。
人生のほとんどが本になっている。

なのに幼少期だけ存在しない。

認知症で全てを失っても。
その記憶だけは失われていないのだ。

翌日。

夕方五時。
また騒ぎが始まった。

「帰る！」

職員たちが駆け寄る。

「お母さんが探してる！」

この間までなら厄介な利用者だった。

でも今は違う。

八十年以上前。
母親とはぐれた小さな少女。
そしてそのまま年老いた少女。

私はハルさんの前にしゃがんだ。

「ハルさん」

涙で濡れた目が私を見る。

「大丈夫ですよ」

「何が？」

私は言った。

「お母さんも、ずっと探しています。」

ハルさんは黙った。

何かを思い出そうとするように。

やがて安心したみたいに笑った。

「そう」

そして呟く。

「よかったぁ」

その日は初めて暴れなかった。

数週間後。

ハルさんは眠るように亡くなった。

仕事の帰り。

私はもう一度図書館へ向かった。

少しためらってから。

検索端末に名前を入力する。

本当の母親の名前だった。

一冊だけ表示された。

『娘を探した記憶』

私は震える手で本を開く。

駅。
交番。
役所。
新聞社。

母親は探し続けていた。

十年。
二十年。
三十年。

誰もが見つからないと言った。
諦めろと言った。
いい加減やめてくれ、と。

それでも探した。

最後のページ。

老いた母が空を見上げている。

「ただ生きていてくれたら、それでいい」

本を閉じた。

気づくと私は泣いていた。

次の日、職場に行くと中村さんは朝食の準備をしていた。

「おはようございます。お疲れ様です。」

「おはよう。」

私はしばらく立ったまま、中村さんを見ていた。

「中村さん」

「ん？」

「前に言ってましたよね」

「何を？」
「白髪の前では立ち上がりなさい、って」
中村さんが少し笑う。
「ああ」
私は窓の外を見る。
絵に描いたような空。
「なんで神様がそんなことを言ったのか、分かった気がします」
「へえ」
「知ってるからなんですね」
「何を？」
私は少し考えてから答えた。
「その人がしてきた苦労とか」
「努力とか」
「愛した人とか」
「失ったものとか」
ハルさんの人生が頭をよぎる。
本当の母親。
育ての母親。
夫。

娘。
探し続けた時間。
忘れてしまった時間。
「本を読まなくても」
私は静かに言った。
「神様は全部知ってるんからなんですね」

中村さんはしばらく黙っていた。

「……そうね」

それだけだった。

私は初めて理解した。

白髪を敬うというのは、
年齢を敬うことじゃない。

その人の人生に敬意を払うことだ。

本当の人生ほど、作り話みたいな物語はない。

図書館には今日も無数の本が並んでいる。
誰かが忘れた人生。
誰かが忘れた恋。
誰かが忘れた後悔。

そして、
誰かが最後まで忘れなかった記憶がある。

お母さんが探してる。

その言葉はもう聞こえない。
けれど私は知ったのだ。
あの言葉の向こうに、一冊の本では収まりきらない物語があることを。

記憶（きおく）のリサイクル

2026 年 10 月 24 日　発行

著者　かちこ

令和 8 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子
編集・発行　函南町教育委員会教育部生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
住所　419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

人が忘れた記憶は回収され、本になり物語へと生まれ変わる世界。介護士の主人公は、認知症の女性が失っていく記憶の中に、誰にも知られなかった人生の真実を見つけていく。

